

史跡・名勝嵐山

発掘調査現地説明会資料



調査区の北から嵐山と大堰川を望む

2004年11月7日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

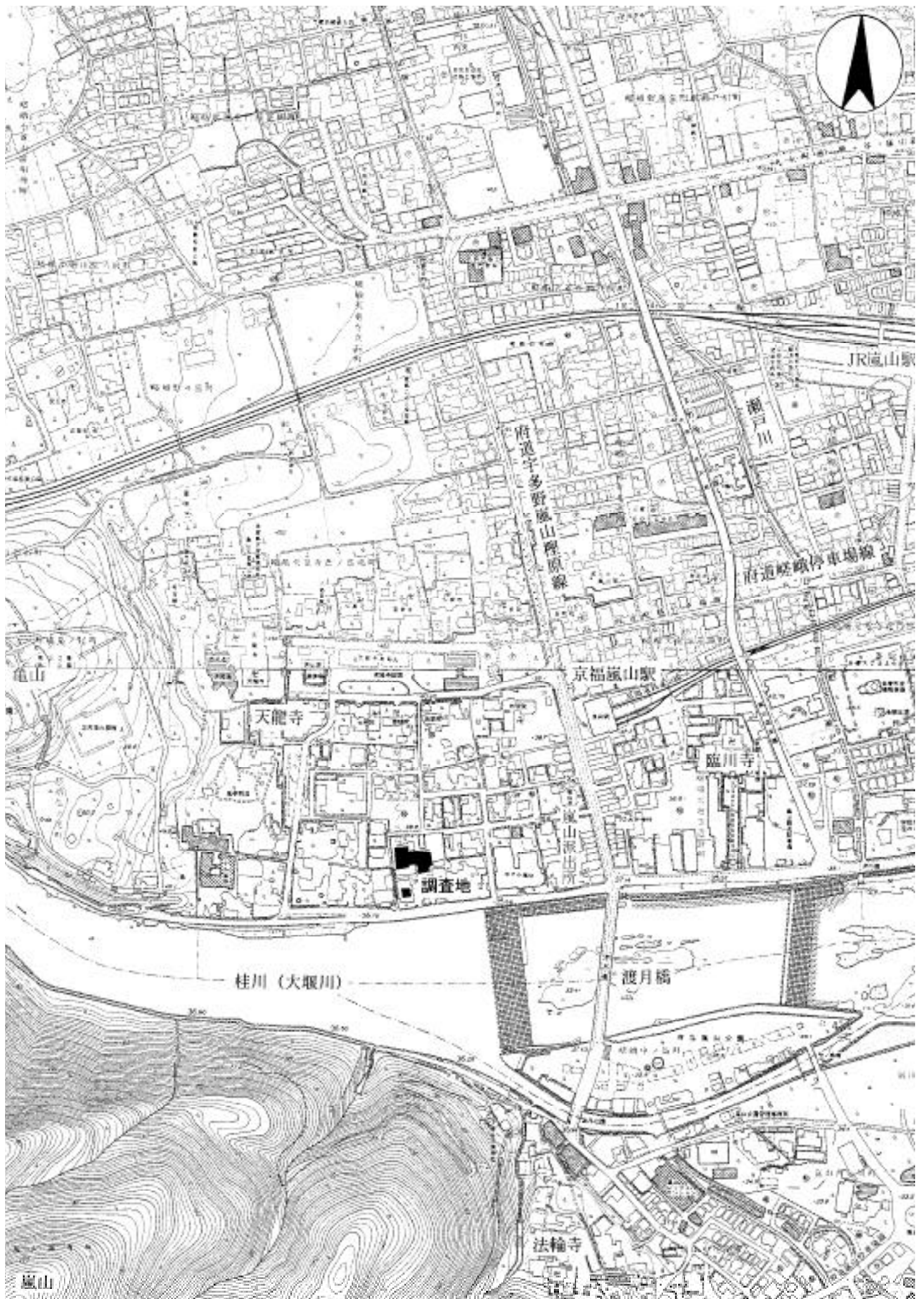


図1 調査区位置図(1:5,000)

史跡・名勝嵐山発掘調査現地説明会資料

調査地 : 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町7

調査期間 : 2004年8月16日 ~ 継続中

調査面積 : 約670m²

調査主体 : 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

今回、仮称旅亭嵐月が平成17年秋に竣工する計画がなされたため、発掘調査を実施しました。調査地は大堰川の北岸、渡月橋から約200m西に位置し、このあたり一帯は史跡・名勝嵐山に指定されています。調査地の周辺は、平安時代には貴族の遊獵の地となり、多くの別業・山荘が営まれ、さらに寺院も建立されました。9世紀中葉の承和年間には嵯峨天皇皇后橘嘉智子により檀林寺が建立され、鎌倉時代には後嵯峨上皇により亀山殿が造営されました。調査地の北には後醍醐天皇の菩提を弔うため、足利尊氏が夢窓国師を開山として暦応2年(1339)に建立した天龍寺があります。西には、天龍寺の後山にあたる亀山、その奥には小倉山があり、大堰川の対岸南には、奈良時代の創建と伝えられる法輪寺があります。

遺 構

遺構は2時期に分けることができます。古い時期は鎌倉時代後期、新しい時期は室町時代前期にあたります。

(古期) 調査区の北側一帯に地業(建物の基礎)の跡を検出しました。その規模は、東西31m以上、南北15m以上あります。調査区外の北と東に広がります。これは、地面を約0.8m掘り下げて、内部を土壌改良しています。その作業単位の境として石列A・Bと地業境Cが約10m間隔であります。石列は約5~25cm径の石を南北に並べ、方向はやや西に偏ります。石列Bの下層は石が約0.6m積み重なります。地業境Cは土層の違いであり、西側は約15~30cm径の礫が多く混じり、東側は礫が殆ど混じりません。また調査区中央部南側に、厚さ約0.2mの焼土層と土壌76・77があります。ここからは、火を受けた痕跡がある壁土や土器・瓦が出土しました。瓦は、小型のものが大半でした。さらにこれらの下層に東西溝190を確認しました。

(新期) 調査区西部に石敷き状の整地層と高さ0.3~0.4mの土壇144・145があります。中央部には大型の柱穴137(東西約1.8m、南北約2.4m、深さ約1.2m。直径0.8mの柱跡がある。)とその南側には約1.5m間隔で柱穴が並ぶ南北方向の柵があります。柵の東側には、同じく南北方向の溝128・148があります。溝128は、幅1.2~2.0m、深さ0.4~0.5mあり、溝148は礫が多く混じり、幅0.6m前後あります。柵の西側、土壇との間には多数の柱穴と完形の土器が多く出土する土壇(138・139・140)があります。

まとめ

現在の地形図と古絵図を検討し、調査地の場所を比定すると、図3「山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図絵図」で見える「朱雀大路」は、現在の天龍寺門前を南北にはしる道路(府道宇多野嵐山檜原線)にあたります(図1参照)。「作路」は、天龍寺門前から造路町を東西に走る道路(府道嵯峨停車場線)にあたります。絵図の下(東)にみえる川は、現在の瀬戸川にあたります。また「総門前路」は、ホテル嵐山西側の道路にあたります。「芹川殿小路」は、嵐山派出所北の東西道路にあたります。さらに現在の天龍寺周辺の路などにも絵図と符合する所があります。これらのことから調査地は亀山殿内の南西部分にあたることわかります。さらに限定すると^(注1) 棧敷殿にあたる場所とみられます。

図4「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」で見える「出釈迦大路、造路」は「朱雀大路と作路」と同じものと考えられます。現在の天龍寺周辺の路なども、さらに多くこの絵図と符合する所があります。そして絵図の大堰川右岸の地形や法輪寺の位置から渡月橋は現在より西へ約100m上流^(注2) にあたり、調査地は^{れいひびょう} 霊庇廟に比定できます。絵図に見える鳥居と柵が今回検出した柱穴137と南北方向の柵にあたるものとみられます。

以上のことなどから今回の調査でわかったことは、

- 1 古期の遺構は、鎌倉時代後期の亀山殿内の棧敷殿の掘込み地業の可能性が高い。検出した約10m間隔の石列A、Bと地業境Cは、掘込み地業の工事単位であろう。
 - 2 新期の遺構は、室町時代前期の霊庇廟とそれに関連する遺構である。
- なおこれらの遺構は、その重要性から保存されることとなりました。

注1 川上 貢『日本中世住宅の研究[新訂]』中央公論美術出版 平成14年 p134 「附亀山殿の棧敷殿について」

注2 渡月橋は、江戸時代初期に角倉了以によって東へ架け替えられ、現在の橋は、その位置を踏襲している。

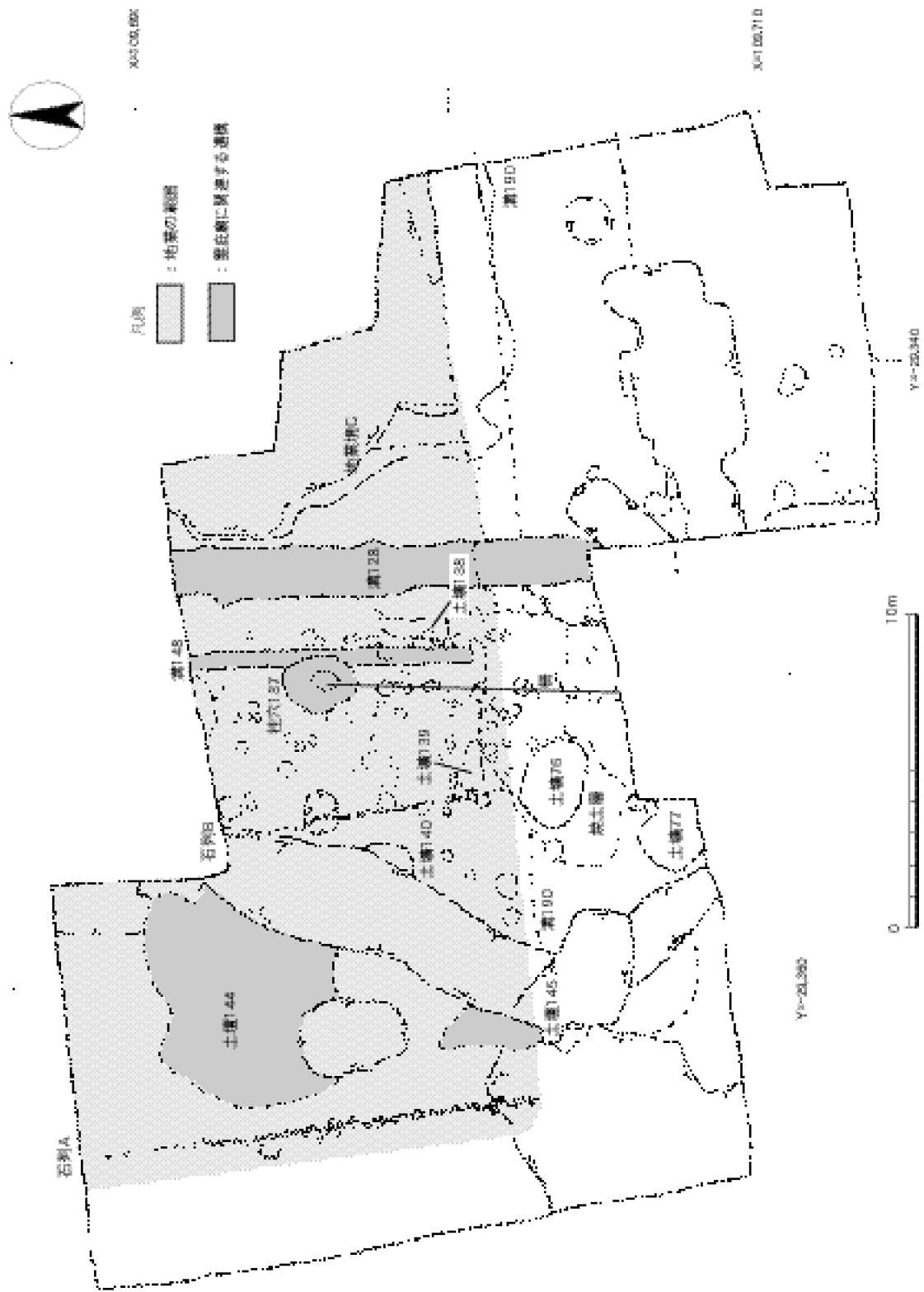


図2 遺構平面図(1:200)



全景写真（南西から）



柵列と柱穴群（北から）



地業西側（北東から）



石列B 掘込み地業の断面（北から）

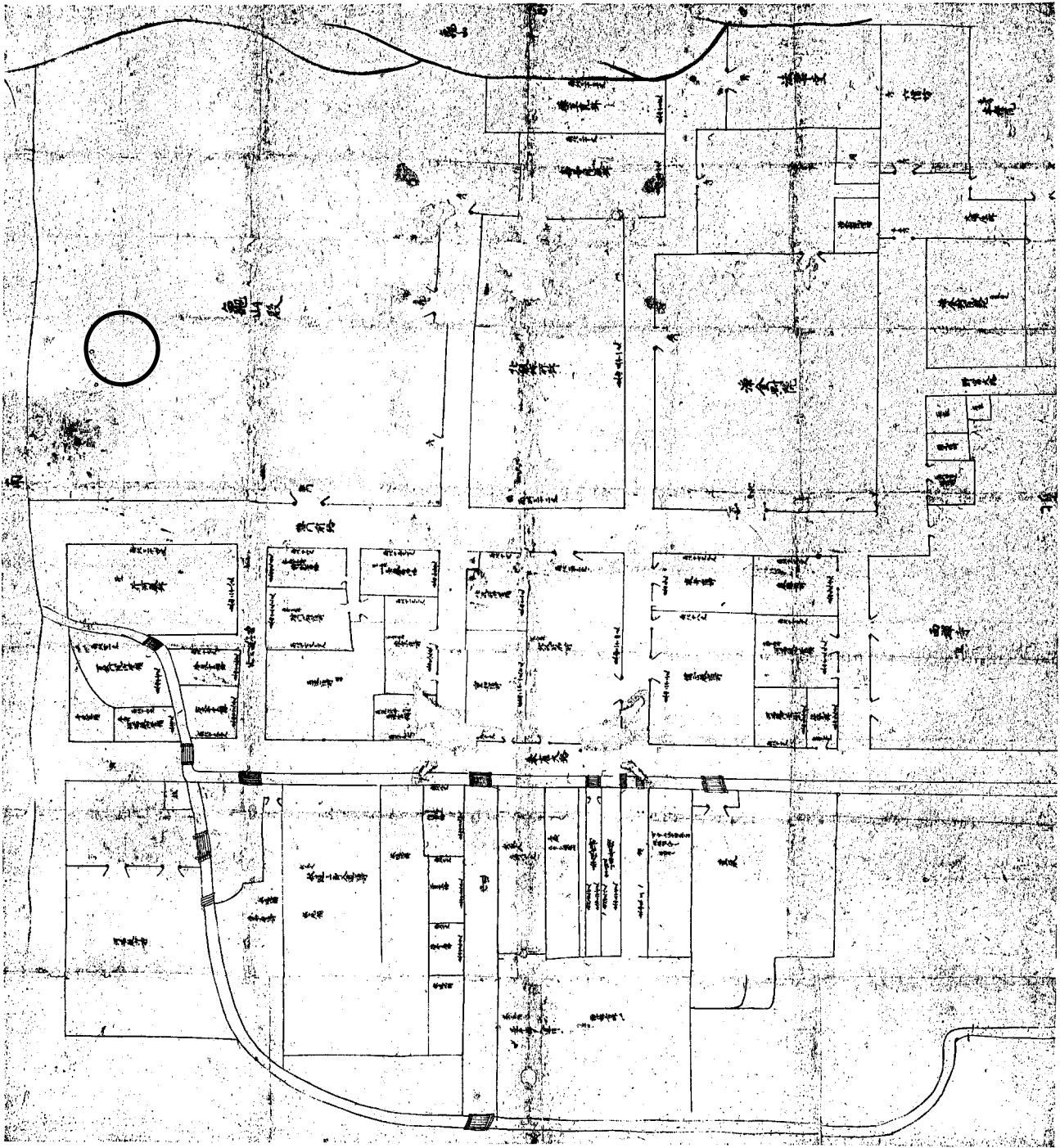


图3 「山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図」 南北朝時代 天龍寺藏

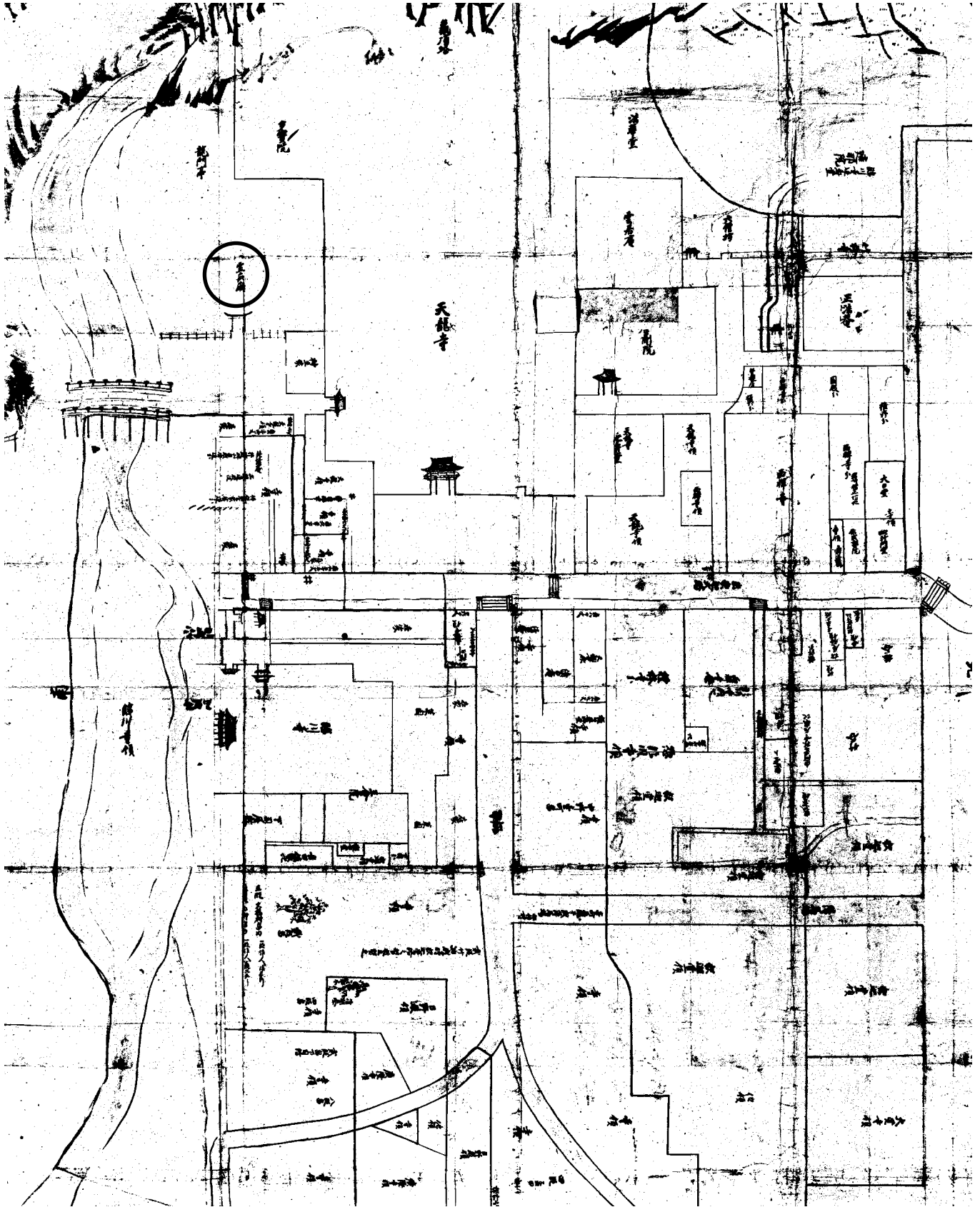


図4 「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」 南北朝時代 「貞和三(1347)年仲冬」 天龍寺蔵

図3・図4は、東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 二 近畿 一』財団法人東京大学出版会 平成4年より抜粋、転載した。

おわび

現地説明会当日に配付しました資料に誤りがありましたので、下記の正誤表を付けさせていただきました。

主な訂正内容は、霊庇廟が天龍寺南側に造営された鎮守（八幡大菩薩）のことによるものです。

なお、当PDFデータについては、修正したものを掲載しましたのでご了承下さい。

史跡・名勝嵐山発掘調査現地説明会資料 正誤表

ページ	行	
2	5	(誤) 溝184 (正) 溝148
2	21～22	(誤) 調査地は後醍醐天皇を祭った霊庇廟に比定できます。 (正) 調査地は霊庇廟に比定できません。
2	28	(誤) 室町時代前期の後醍醐天皇を祭る霊庇廟 (正) 室町時代前期の霊庇廟